

カフェで市民とともに哲学する：  
哲学カフェ@しぞ〜かの歩みをふり返って

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹之内, 裕文 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00008419">https://doi.org/10.14945/00008419</a>

## 論文

# カフェで市民とともに哲学する

## ——哲学カフェ@しぞ～かの歩みをふり返って——

竹之内 裕文\*

「哲学する」とは、何よりもまず「耳を傾ける」ことだ。哲学者とはあらゆる質問に対して答えられる人物ではない。すでに与えられた答え、主流の答え、あるいはそれに対抗する答えが哲学者を考え込ませるのだ。哲学者とは、質問する人、解決策としてまかり通っているものを厳密に再検討する人間なのだ。実をいえば、哲学者が本来の自分の技能を実践するためには、まず流布している考えを聞くことから始めなければならないのである<sup>(1)</sup>。

日常生活において私たちは、ふとした違和感や疑問を抱く。ただ大抵の場合、それらは「問い」にまで育て上げられる以前に手放され、忘失されてしまう。それに対して、適切な聴き手に恵まれるとき、身近な違和感や疑問は言葉にもたらされ、具体的な問いの形をとる。ここで、語り手と聴き手の役割が固定されず、互いに聴くという姿勢とともに対話が進展していくならば、共に哲学する端緒がここに開かれることになる。

共に哲学する場を市民とともに拓きたいという願いとともに、「哲学カフェ@しぞ～か」は2013年に創設された。私たちは同年6月29日に創設記念講演会を開催し、8月から毎偶数月に哲学カフェを開催してきた。

静岡では目新しい試みということもあったろうか、哲学カフェは、地域メディアの注目を集め、多くの参加者を得てきた。当初の予想をはるかに超える活況を呈し、反響を呼んできた。私自身も、哲学カフェの企画・運営を通して、貴重な学びを積んできた。市民とともに哲学するという試みは、たとえば「哲学」という学的営みについて再考する機会を与えてくれた。さらに生涯学習・社会教育のあり方に対しても、哲学カフェは示唆的であるように思われる。

こうした見通しのもと、本稿は以下の手順で考察を進めていく。はじめに、哲学カフェ創設の経緯と趣旨を確認する（第1節）。次いで、これまでの実施概要と運営形態を紹介する（第2節）。さらに哲学カフェの最新の動向について報告し（第3節）、そのうえで哲学カフェという実践について考察する（第4節）。

### 1. 船出まで——哲学カフェ創設までの歩み

毎回の哲学カフェでは、討議に入る前に、参加者全員で「創設趣意」と「ルール」を確認する。このうち「創設趣意」には、哲学カフェ@しぞ～か創設の背景と理念が簡潔にまとめられている。そこでまずこれを紹介し、必要な補足を加えていくことにしよう。

\* 静岡大学大学院農学研究科教授

## 哲学カフェ@しぞ〜か創設趣意

世話人の一人は、2011年から12年にかけてスウェーデンで生活する機会を得ました。そこで驚かされたのは、日常生活のさまざまな場面で、次々と議論が繰り広げられる光景でした。職場の休憩時間や週末のホームパーティーで、さらには美容室やタクシー車中で、スウェーデンの人たちは気軽に議論を始め、これを楽しんでいました。このような討議する文化を土台に、スウェーデンの先駆的な社会保障制度と環境政策は形づくられてきたのです。

わたしたちが身をおく社会はどうでしょう。すでに福沢諭吉は、「無議の習慣」（『文明論之概略』）の克服という日本社会の課題を指摘していました。しかし日本社会ではその後も、政策決定や社会システムの構築が市民的な討議と切り結ぶことがほとんどなかったのではないのでしょうか。むしろ社会的な合意形成にむけた努力を棚上げにし、それゆえ望ましい社会のあり方をめぐる公共的討議を欠いたまま、政治、経済、医療、福祉、教育などの分野で重要な政策が決められてきました。原発政策やTPP加盟交渉をめぐる近年の動向は、その延長線上にあるとあってよいでしょう。

わたしたちの社会では、どうして市民的討議が盛り上がらないのか。その背景的な構造については、「タテ社会」（中根千枝）をはじめとする分析が示されてきました。たとえば安富歩の指摘によれば、日本社会では「役」と「立場」が大きな位置を占める。会社、役所、学校などでの「役」と「立場」を離れて発言できないかぎり、互いの違いを楽しんで討議することはできない。だとしたら市民的討議や社会的合意形成は不可能であり続けます。

わたしたちは、どうしたらよいのか。討議が困難である理由を分析することも大切ですが、むしろ思い切って、討議の場を設けてしまったらどうでしょう。相手の社会的立場や役職を探り合ったり、「空気」を読んだりするのではなく、参加者一人ひとりが自由に発言し、互いの発言に真剣に耳を傾ける。それは参加者が各々の考えを吟味し、視野を広げる得がたい機会となるでしょう。性別、年代、職業を異にする参加者は、身近な共通課題に対して、それぞれの視点から光を投げかけ、それによって問題が立体的に浮かび上がってくるでしょう。多様な人たちが集まり、開かれた討議に参加すること、それは民主主義のレッスンともなります。

哲学カフェという企画は、日本社会でも少しずつ広がりを見せ始めていますが、静岡では初めての試みです。豊かな自然環境のもと固有な文化を育ててきた静岡（しぞ〜か）の地にも、市民が自由に討議できる場を設け、そのネットワークを広げていきたい。哲学カフェ@しぞ〜かは、世話人一同のそのような願いとともに創設されました。

本カフェでは、多種のテーマのもと、討議を楽しんでください。多様な価値観・考え方にふれ、自分との違いを楽しんでください。臆することなく発言し、敬意をもって、ほかの人の発言に耳を傾けてください。世話人は、その討議が豊かなものとなるようお手伝いします。

2013年9月 世話人一同

## (1) 討議する社会との出会い

ここでもふれられている通り、私は2011年4月から翌年4月まで一年間の在外特別研修の機会を得て、スウェーデンのボロース大学健康科学部に客員教授として在籍した——ボロース（Borås）は、スウェーデン第二の都市であるヨーテボリ（Göteborg）から内陸（東）にむかって約65キロメートルに位置するコミュニティ（人口約10万人）である。

その一年間で私は「森と湖の国」の生活を満喫するとともに、討議する社会・文化を体感した。職場（大学）はもとより、友人宅、パブ、美容室、そしてタクシーの車内で、会話の中でなんらかの疑問や異論が生じると、「Let's discuss!」というかけ声とともに討議が始まる。ここで「討議discussion」と聞いて、特段に構える必要はない。異なった思想に対する敬意と関心に導かれて、互いの主張の論拠が吟味される、そのプロセスが大切にされ、楽しまれていたように思う。

スウェーデン・スタイルのレッスンを積むなかで、私は、討議を通して身近な課題を探究するという共同行為に魅せられた。それと同時に、討議が市民社会と民主主義の基盤を担っているという認識を深めた。そして討議が成立するためには、市民に対して正確な情報が開示され明確な言葉で届けられねばならない。こうした問題意識に駆り立てられながら、私は東日本大震災後の日本社会の歩みを注視していた。しかし異国の地に届く情報はいずれも、討議する社会・文化からかけ離れた日本社会の姿を伝えていた。

原発事故との向き合い方、被災者支援ないし復興のあり方、どの課題をとり挙げても、市民的な討議と社会的な合意形成にむけた努力が軽視されたところで、官僚主導のもと、重要な政策が次々に決定されていく<sup>(2)</sup>。望ましい社会のあり様について開かれた議論が繰り広げられることもなく、既成事実ばかりが積み重ねられていく。それとともに市民は無力感、閉塞感を抱き、政府・行政に対する不信を募らせていく。市民間に信頼関係は育まれず、社会的連帯の糸口すら掴めないまま、日本社会は分断と孤立の様相を強めていく<sup>(3)</sup>。

こうした社会的断層を架橋するため、政治には、共有可能なビジョンを掲げ、多種の利害対立や緊張関係を越えた討議の機会を創出し、社会的連帯を構築するという役割が求められる。しかし日本の政治は、これら重要な課題に正面から取り組むどころか、むしろ逆に、利害対立や緊張関係を煽り利用してきた感がある。政治的な言説はここで、「やみくもに特権や保護を叩き、これを引き下げることで政治的言説を拡げようとする言説」に墮してしまっている<sup>(4)</sup>。

「引き下げデモクラシー」と呼ぶべき現象の背景には、かつて福沢諭吉が「無議の習慣」と呼んだ日本社会の宿痾が控えているように思われる。かりに欧州であれば大騒ぎになり、激しい舌戦が繰り広げられるような大事件、安閑としていられない事態を前にしても、日本人は「無議の習慣」ゆえに、開くべき口を開かず、発するべき議論を発しないと、福沢は『文明論之概略』（初版1875年）で指摘している<sup>(5)</sup>。

習慣の力は大きいということだろうか、「無議の習慣」は未だに改善されていないように映る。しかし福沢が続けて述べるように、「習慣」が「天然の欠点」でないかぎり、その矯正は可能だろう。習慣を徐々に変えていくため、たとえば開かれた討議の場を定期的に設けたらどうだろうか。このいささか単純な着想とともに、哲学カフェ創設にむけた一歩が踏み出されることになった。

## (2) 生命環境倫理学フォーラム

2012年5月、私は帰国とともに、さっそく「生命環境倫理学フォーラム」——この名称は私の研究室名に由来する——を立ち上げた。静岡大学の学生・教員と市民たちに声をかけ、月1回の討議の機会を設けた。フォーラムは、1) 主要な社会的論点について参加者の見解を表明し、深め合う、2) その討論を通して自己を鍛えつつ、連帯を築くという目標のもと、各回のテーマに応じたテキストを参加者が事前に読むという前提で進められた。

表1 生命環境倫理学フォーラム（2012年度）の概要

開催日	内容	
5月25日	イントロダクション「討議を通して新たな社会を展望・構築する」	
	テーマ	テキスト
6月22日	環境危機をどう受けとめるか?	『スウェーデンに学ぶ「持続可能な社会」』（小澤徳太郎、朝日新聞出版）
7月6日	原発危機とはなにか?	『原発危機と東大話法』（安富歩、明石書店）
10月12日	格差をどう考えるか?	『格差社会』（橋木俊詔、岩波新書）
11月9日	生活保障はどうあるべきか?	『生活保障』（宮本太郎、岩波新書）
12月7日	食料問題とはなにか?	『日本の食料が危ない』（中村靖彦、岩波新書）
1月11日	日本の農業をどうするか?	『日本農業の真実』（生源寺真一、ちくま新書）
2月22日	お金とはなにか?	『エンデの遺言 根源からお金を問うこと』（河邑厚徳+グループ現代、講談社α文庫）

ただ、市街地から離れた大学の研究室を会場としたこともあり、わざわざ大学まで足を運んでくれる市民は少なかった。結果として、メンバーの大半は学生（学部生・大学院生）と大学教員で占められることになった。討議がテキスト読解を前提に進められることもあって、フォーラムは、大学の通常のゼミナール（演習）と同じようなものになってしまった。フォーラムには、異質な者との対話が生み出す緊張感と創造性が欠けていた。

半年も経つと、フォーラムの中心メンバーは「街に出る」準備を始めた。そのような折、ある哲学会で同席した堂園俊彦氏（静岡大学・人文社会科学部）に水をむけたところ、市民とともに街で哲学するという試みに意欲を示してくれた。こうして堂園氏を加え、哲学カフェの設立にむけた準備が加速していった。

### (3) てつがくカフェ@ふくしま

しかしメンバーのなかには、哲学カフェを実際に体験した者がいない。せめて一度くらいは見聞しておいた方がよいだろうと判断し、私たちは、旧知の小野原雅夫氏（福島大学・人間発達文化学類）が世話人を務める「てつがくカフェ@ふくしま」の特別編3（2013年3月10日、アオウゼ）に参加した。当日の参加者は42名。受付で手渡された資料には、次のように記されていた<sup>(6)</sup>。

あの東日本大震災、そして東電福島第一原発事故から2年を迎えます。

この間、日本社会は何を学んだのでしょうか。昨年末に行われた衆議院選挙では「脱原発」が声高に叫ばれた一方で、原発を推進してきた政党が圧勝しました。

私たちが失ったものの意味を、私たちはほんとうに考えてきたと言えるのでしょうか。いままで、そして今なお私たちに強いられている犠牲をどのように考えたらよいのでしょうか。

てつがくカフェ@ふくしま特別編3は「フクシマはどこへ——絶望と怒りの淵から」をテーマに開催します。

冒頭の解題によると、「フクシマはどこへ——絶望と怒りの淵から」という討議テーマに先だって、世話人の間では「福島は犬死か?」というテーマが検討されたという<sup>(7)</sup>。しかし、これに対して異論が提起され、「犬死」の解釈をめぐる激しい応酬が繰り広げられたという。そのような経緯の紹介もあって、特別編3の前半部では、「犬死」の受けとめ方を中心に討議が進められた。その後、休憩を挟んだ後半部では、議論は「フクシマはどこへ?」という問いに収斂していった。

参加者たちはそれぞれ等身大の思いを、臆することなく言葉にしていた。なかでも印象的だったのが、



言葉に詰まりながら、自らの経験と境遇を訥々と語る初老の女性と、その発言に静かに聴き入る参加者たちの姿であった——その光景は、今でも私の臉に焼きついている。

舞台裏まで明かし、鮮明に論点を打ち出した解題とは打って変わり、いざ討議が始まると、ファシリテーターの小野原氏はほとんど討議に介入せず、ただ座っているようにすら感じられた。しかし今ふり返ってみると、その討議の場はある種の信頼感によって支えられており、その信頼感はファシリテーターの姿勢——論点整理や議論の軌道修正など介入的言動の欲求を抑え、異なった背景をもつ人びとの多様な声にひたすら耳を傾け続ける姿勢——によって醸成されていたように思う。

自分もこのような言葉の出来事に共に与りたい。そのような想いが溢れ、静岡の街で哲学カフェを開くという決意が固まった。哲学カフェに対する熱い想いと提供された貴重な資料を手土産に、私たちは福島を後にした。哲学カフェ@しぞ〜かの創設までおよそ百日に迫った晩だった。

## 2. 航海のはじまり——創設記念講演会と定例カフェの実施概要

その後の打ちあわせで、来たる8月から毎隔数月に哲学カフェを実施すること、6月にはイベントとして創設記念講演会を開催し、講師として小野原雅夫氏を迎えることが決まった。次に会場探しが始まった。

### (1) 会場探し

哲学「カフェ」と名乗るからには、やはりカフェ(喫茶店)で開催したい。しかし、世話人たちのネットワークを活用して探索してみたものの、会場を提供してくれる喫茶店は見つからなかった。そこでさしあたり喫茶店での開催は断念し、てつがくカフェ@ふくしまに倣い、貸会議室を借用することにした——喫茶店での開催は将来的な目標とし、参加者のネットワークを拡充しながら、実現を図っていくことにした。

その後、静岡大学イノベーション社会連携推進機構の助力を得て、B-nest 静岡市産学交流センター<sup>(8)</sup>の貸会議室を確保した。日曜日が閉館日という制約もあって、偶数月の第4土曜日(2014年度から第一土曜日)に哲学カフェを開催することに決めた。肝心のカフェ(コーヒー)は、Tully's Coffeeのケータリングサービスを利用することにした。哲学カフェはイノベーション社会連携推進機構との共催というかたちをとり、同機構に会場使用料とコーヒー代を負担していただいた(第8回まで)。

### (2) 創設記念講演会

こうして2013年6月29日(土)の創設記念講演会を迎える。講演タイトル「福島で哲学するという事——てつがくカフェ@ふくしまの取り組みから」は、世話人たちが考案したもので、これには、生きることのローカルな足場を大切にしつつ、広く、深く、普遍的な事柄を探求していきたいという願いが込められている。「哲学する philosophieren」という動詞は、カントの『純粋理性批判』に由来する。同書では「哲学は(それが歴史的でないかぎり)決して学ぶことができない」こと、人は「せいぜいのところただ哲学することを学ぶのみである」ことが指摘されるのである<sup>(9)</sup>。

創設記念講演では、1992年のパリで哲学カフェが偶然に生まれた経緯が紹介された後、東日本大震災直後の福島における哲学カフェの創設とその後の歩みが報告された。第1回てつがくカフェ@ふくしまは2011年3月26日に開催される予定だったが、震災・原発事故のために中止を余儀なくされ、5月22日、仕切り直しの格好で第1回カフェが実施されたという。「いま、〈ふくしま〉で哲学するとは？」というテーマのもと、14名(世話人を含む)が参加したという。

てつがくカフェ@ふくしまという先行例を踏まえて、参加者は20名に達すれば上首尾と考えていたとこ



図1 創設記念講演会チラシ

ろ、創設記念講演会には、予想をはるかに上まわる53名（6名の世話人を含む）が参加した。アンケートに対する回答からいくつか記述を拾い、参加者の反応を紹介しておこう。

- てつがくカフェについて、会の仕組み内容から、福島という場所だからこそ考えられる、考えさせられる内容（様子）も紹介いただけたのでよかった。
- 今回の小野原先生の話は福島というある意味特殊な地域の中でのお話でしたが、@しぞ〜かの場合はできるだけ片寄らないテーマを希望します。
- 今日は説明だけだったけれど、実際のカフェを体験してみたいと思います。書評カフェもおもしろそうです。
- 哲学者の話聞いたことがなかったのでとても新鮮でした。
- 哲学といわれると敷居が高い気がします。対等と設定されても、難しい気がしますので、その垣根をどうとっていくか期待しております。でも、“哲学”とついでる方が素敵です♡
- 毎月1回開催を希望します



図2 創設記念講演会

### (3) 定例カフェの実施に向けて

創設記念講演会の準備と並行して、私たちは、第1回哲学カフェ@しぞ〜か(8月24日)の準備に着手した。まず世話人間で情報を共有し議論するため、MLを立ち上げた。次いで、「哲学カフェ@しぞ〜かの進め方」とアンケートの文案を練った。さらにカフェの周知のため、開催日時、場所、テーマを盛り込んだフライヤーを作成し、世話人たちのネットワークを通じて配布した。Facebookとblogのほか静岡大学ホームページでも情報発信した。

次頁の「哲学カフェ@しぞ〜かの進め方」(略称「ルール」、2014年4月5日付の最新版)は「てつがくカフェ@ふくしま」の進め方(確定版)<sup>(10)</sup>を参考に、世話人全員で協議し改訂を加えたものである。ルールには、大別して5つの項目が立てられている。そのうち1と2は「完全義務」——厳格な遵守が求められる義務——に、3と4は「不完全義務」——従うことが推奨される義務——に相当する。

ルール1は、「役」や「立場」に基づく社会的な役割関係と専門家／非専門家間の権力関係を解除し、対等かつ開かれた討議の土俵を担保することを目的としている。そもそも「カフェ」には、社会的地位や権威から自由に、対等の立場で議論するという伝統がある。現に17世紀のロンドンにおけるコーヒーハウスや読書クラブの活動は、同時期に発展した新聞・雑誌などのメディアとともに、開かれた討論の場を提供し、それを通して市民的公共性の形成に不可欠な役割を果たした<sup>(11)</sup>。これを踏まえればルール1は、カフェの伝統に立ち返るといふ試みの表明と見ることができる。

2と3では、聴くという姿勢とともに討議が立ち上がるという認識のもと、相手に対する関心・配慮の大きさが説かれる。4では、対話の促進というファシリテーターの役割が明示／限定され、対話とともに進行する思考のプロセスを共に楽しむという方向性が打ち出される。最後に5では、哲学する(根本から問う)という行為は完結しないという認識のもと、カフェでの討議を機縁に、引き続き哲学していったほしいという願いが表明される。

以上のように、哲学カフェ@しぞ〜かの進め方は、討議のルールを確認するという格好をとりながら、共に哲学することのダイナミズムを描き出す。「カフェで共に哲学する」ことに対する私たちの理解がさらに深まれば、今後もルールは改訂されていくだろう。

## 哲学カフェ@しぞ〜かの進め方※

### 1. お互いに対等な立場で話し合ってください。

- 1) 参加者の中に例えば上司と部下、教員と教え子等がいたとしても、この場では上下関係は忘れて、対等な参加者として話し合ってください。
- 2) そのために「〇〇先生」など敬称をつけて呼ぶのはやめ、お互いに「〇〇さん」とかニックネームなどで呼び合ってください。
- 3) 哲学その他に関する専門知識があるかないか、多いか少ないかということを争う場ではありません。知識の多寡ではなく、論拠の正しさによって議論を交わすようにしましょう。

### 2. 聞くときは最後まで聞き、話すときはわかりやすくまとめてください。

- 1) 他の参加者の意見を最後まで聞いてください。そして、できるかぎり正確に理解するよう努力しましょう。
- 2) 皆さん最後まで聞いてくださいますが、自分の話だけで時間を取ってしまっはいけませんので、話はわかりやすくできるだけ簡潔にまとめるようにしてください。
- 3) ただ自分の身近な具体例を述べるのではなく、理由や根拠を明確にし、より多くの人に伝わるように発言しましょう。

### 3. 独白の応酬ではなく、対話となるように努力しましょう。

- 1) 他の人が述べた意見と無関係に話すのではなく、関連させながら話すようにしましょう。
- 2) 他の人の意見に同意できなかったとしても、相手の意見を頭ごなしに否定するのはやめましょう。相手に対して質問を投げかけ、相手の意見を理解するよう努力しましょう。
- 3) 自分の考えと皆さんの考えとの類似点や相違点を確認しながら、思考の流れそのものを楽しみましょう。

### 4. ファシリテーターは皆さんの哲学的対話が活性化するようにお手伝いします。

- 1) ファシリテーターが自分の意見を押しつけたりすることはありません。
- 2) ファシリテーターは、参加者全員ができるだけ対話に参加できるよう気を配ります。

### 5. 解散後もずっと考え続けていきましょう。

- 1) 今日のこの場で議論は終わりではありません。解散後もずっと考え続け、議論を継続していただければと思います。この場で言い足りなかったこと、その後考えたことなどを掲示板に書き込んで、参加者同士の議論を楽しんでください。

（掲示板アドレス）<http://6230.teacup.com/tetsushizu/bbs>

- 2) 会の終了後できるだけ早いうちにブログに今日の記録をアップする予定です。

（HPアドレス）<http://tetsushizu.exblog.jp/>

※作成にあたっては、「てつがくカフェ@ふくしま」のものを参考にさせていただきました。



#### (4) 第1回哲学カフェ

2013年8月24日（土）、待望の第1回哲学カフェが開催された。初回は哲学カフェ@しぞ〜かのカラを打ち出そうということで、世話人たちが共通して関心を寄せる「自然な死」をとり挙げた。哲学カフェの世話人代表として私が7月24日の静岡新聞（「この人」の欄）で紹介され、FM.Hi!（静岡県中部のコミュニティラジオ放送局）の8月9日の番組「人にぞっこん」に出演したことが影響したのか、あるいは討議テーマに対する関心が大きかったのか、最大収容定員48名の会議室に55名の参加者が集まり、当初から大混乱に陥った。

二つの円を描く形で、会場いっぱいにパイプイスを並べておいたが、受付開始とともにあっという間に席は埋まってしまった。B-nestの担当者にパイプイスの追加をお願いするが、消防法の関係で交渉は難航した。最終的に、数名の参加者が円の中央に、床に直に腰を下ろす格好でカフェはスタートした。

冒頭で、哲学カフェのルールと討議テーマの設定理由（「解題」）を共有した。引き続き前半のグループ討議（1時間）に入り、10分間の休憩を挟んで、後半のグループ討議（1時間）を行った。最後に、世話人（初回は私が担当）によるミニレクチャーにおいて、「自然な死」をとり巻く状況とその歴史的背景が展望された——ミニレクチャーは、参加者への「おみやげ」を期して、第6回まで継続されたが、準備の負担も大きく、また参加者間の対等な討論という原則に反するという懸念もあって、第7回カフェ以降は廃止された。

終了後は懇親会である。本カフェでは、てつがくカフェ@ふくしまと同様、二次会というシンポジウム（饗宴）の場を大切にしている。現にその席で、カフェに対する率直な感想や新鮮な提案が提起されることも少なくない。

なにしろ初めてのカフェの試みだったこともあり、多くの反省点が残された。ただ参加者には概ね好評だったようである。44名のアンケート回答者（性別：男性28名、女性16名、年代：10代 1名、20代 8名、30代 7名、40代 9名、50代 7名、60代 10名、70代以上 2名）のうち、「期待以上」「ほぼ期待通り」「期待はずれ」「どちらともいえない」と回答した方は、それぞれ12名、18名、1名、11名であった（無回答が2名）。アンケート用紙に記載された参加者の感想・意見（自由記述欄）を紹介しておこう。

#### 【今回のカフェに対する感想・評価】

- 内容は期待通りだったが、人数が多すぎた。
- 多くの参加者があったのにはびっくりした。
- 討論をもう少し少人数でできた方がよかった。
- 良くも悪くも（期待以上）、でも良い方が大きいかな。皆さんが積極的に話されていて、いろいろなお話・考え方が聞けて良かったです。が、どうも議論になるために、共有すべき情報・事柄が理解できなかったです。
- 活発な議論が交わされたため（期待以上だった）。
- 様々な人の意見が聞けたこと（期待以上）。
- 皆さんめちゃめちゃしゃべるんですね。（期待以上）。
- 体験談が多く、レクチャーもあってよかった。



図3 第1回哲学カフェチラシ



図4 第1回哲学カフェ

- レクチャー前に討論をやることで、論点が広がって良かった。レクチャーも参考になった。
- 様々な立場の方が集まるため、議論が混乱する場面が多かった。
- 予想はしていたが、議論にならず、体験談・自分の価値観をしゃべるようになっていく。勝手にルール破ってしゃべり続ける。
- 使われていない部分の脳を使いました。
- 想像と全く違う展開になって、興味深かった。
- ちょっとむずかしく感じた。
- 難しくって議論に全く参加できなかった。
- 関東や関西の哲学カフェを知っていたので、こういうものだと思っていた。

【今後のカフェに対する期待】

- 意見をぶつけ合う事は良いと思う。人は考え方が個々で違うのが当然。
- 静岡でこのように哲学を語り、聞く場ができた事、嬉しいです。これからも皆さんがどんなことをどう考え感じているのかを知りたいです。
- このような場ができた事が素晴らしいと思う。是非続けていって頂きたい。こういった動きが広がっていくとよい。

(5) 第2回以降の哲学カフェ

第2回以降のカフェについては、立ち入った紹介を割愛して、実施概要のみ提示しておく。ご覧の通り、第8回までのカフェは、B-nestの貸会議室を会場に実施された。第9回以降はカフェ（喫茶店）に会場が移され、大きく様変わりする——第9回以降の動向については後述する。また第5回までは、2～3のグループ（20名を超えない）で討議（60分×2回）を進め、最後に各グループ討議の論点を紹介する（10分×2回）というスタイルをとった。第6回からは、前半のグループ討議（70分）を経て、後半に全体討議（70分）を実施してきた。

表2 定例カフェの実施概要

	日時	会場	テーマ	参加者数 (世話人数)
第1回	2013年8月24日	B-nest 演習室4	自然な死とはなにか？	55名(5名)
第2回	10月26日	B-nest 大会議室	日本はガラパゴス化しているか？	26名(8名)
第3回	12月21日	B-nest 大会議室	子育ては誰の責任か？	38名(9名)
第4回	2014年2月22日	B-nest 第1会議室	よく生きるとはどういうことか？	33名(8名)
第5回	4月5日	B-nest 小会議室1・2	日本は脱原発へと踏み出すべきか？	34名(9名)
第6回	6月7日	B-nest 小会議室1・2	幸福であるとはどういうことか？	37名(9名)
第7回	8月2日	B-nest プレゼンテーション ルーム	食べものを選ぶとはどういうことか？	35名(7名)
第8回	10月4日	B-nest 小会議室1・2	自衛権を考える——国を守るとはどういうことか？	34名(8名)
第9回	12月6日	ザ・リブレットカフェ丸井静岡店	老いるとはどのようなことか？	39名(8名)
第10回	2015年2月7日	スノドカフェ七間町	哲学するとはどういうことか？	39名(7名)

(6) 運営組織と運営形態

前述の通り、哲学カフェは第9回以降、喫茶店に会場を移し、大きく様変わりする。ここでは第8回カフェまでの運営組織と運営方法を紹介しておく。

哲学カフェの運営は世話人によって担われる。世話人は現在10名で、大学教員2名、高専教員1名、市民4名、大学生・大学院生2名、高校生1名という構成である。このうち大学・高専教員である堂園俊彦氏（静岡大学・人文社会科学部）、小柳敦史氏（沼津工業高等専門学校）、そして私が共同代表を務めている。

第6回カフェを一例として、哲学カフェの運営方法を見ておこう。カフェ当日、世話人は打ち合わせのため11時半（場合によっては11時）に集合する。第6回（当日の）カフェの進行等に関する最終確認を済ませてから、第7回カフェの役割分担や第8回カフェの討議テーマについて打ち合わせる。

主な役割としては、全体討議のファシリテーション（1名）、グループ討議のファシリテーション（2～6名）、グループ討議のグラフィックファシリテーション（2～6名）、ルールと創設趣意の説明（1名）、討議テーマの提題と解題（1名）、司会（1名）、受付（1名）、飲み物（コーヒーと紅茶）担当（1名）、写真撮影（1名）、イノベーション社会連携推進機構に提出する報告書の作成（1名）がある（図9参照）。討議テーマは、アンケート結果を踏まえながら、世話人の合議により決定する。アンケートは数回の改訂を加えつつ、第9回カフェまで継続的に実施してきた。第10回カフェからは、参加者の合議により次回の討議テーマを決めるスタイルに変更したため、アンケートはとりやめた。第3回カフェのアンケート用紙（図10）を見ておこう。



図5 第6回カフェの全体討論の様子



図6 第7回カフェのグループ討議の様子



図7 第7回カフェの全体討論の様子



図8 グループ討議のグラフィックファシリテーション

**第6回 哲学カフェ@しぞ〜か**

- 日時: 2014年6月7日(土) 14:00~17:00 (13:30~受付)
- 会場: B-nest 静岡市産学交流センター 小会議室1・2 (葵区御幸町3-21 ベガサート内7階)
- テーマ: 幸福であるとはどういうことか
- 必要物品: マイクセット、資料(創設趣旨+ルール、アンケート、次回のチラシ)、鉛筆、コーヒー&お茶、カメラ

時刻	所要時間	概要	内容	竹之内 小柳 國弘 村山 佐野 海野 親月ちゃん 伊東 松尾										備考	
				統括 フアンリ1	フアンリ2	趣旨& ルール説 明	司会	受付 &解題	飲み物係 & フアンリ1	受付	飲み物係 & フアンリ2	写真&報 告書			
11:30	60分	新静岡セノバ3Fフードコート集合 食事&打ち合わせ	・今回の進行等の確認 ・次回(第7回)の打ち合わせ(リーディングの骨格等)と第8回の討議テーマの確認	食事&打ち合わせ(12:50まで)											
13:00~	30分	会場準備	・会場準備 ・受付設置・配布資料セット ・飲み物準備	会場準備										コーヒー写真	
13:15~	15分	受付	・資料、アンケート等配布					受付	飲み物係	受付	飲み物係	受付		受付で資料とアンケート配布	
13:30~	20分	開会・趣旨説明・解題	・あいさつ、趣旨とルール説明 ・スケジュール説明、資料確認・解題			趣旨& ルール	開会あいさ つ	解題							
13:50~	70分	グループ討議	・グループに分かれて、テーマに対して暫定的な回答を求めて討議	1補助	フアンリ 2	フアンリ1	2補助	フアンリ1	2補助	フアンリ1	2補助	フアンリ1	2補助	フアンリ1	2補助
15:00~	10分	各グループの回答とその背景の提示		とりまとめ				回答と背景			回答と背景				
15:10~	20分	休憩	・自販機、トイレ、非常口等の場所、再開時刻をアナウンス	2グループを1つのまとまりにする(机の撤去)			休憩入りと再開をアナウンス		2グループを1つのまとまりにする(机の撤去)						
15:30~	70分	全体討議	・前半部で出された暫定的な回答について、全員で討議	全体 フアンリ									写真		
16:30~	20分	総括と展望		フアンリの まとめ			最後に感想						写真		
16:50~		事務連絡・閉会	・あいさつ&次回の案内 ・アンケート提出のお願い、忘れ物ないよう身の回りの確認をお願い ・2次会をアナウンス				次回の案内&閉会 あいさつ								
~17:30		完全撤収		片付け 受付でアンケート回収											
18:00~		二次会@「/菜トウランジェ」	・20名くらいで予約				幹事							※後日、報告書を作成	TEL:054-275-5532 / ハビルコ7F

図9 第6回哲学カフェ進行および分担表





### 3. 新しい海へ——哲学カフェの現在

#### (1) カフェへ！

2014年7月、世話人の一人から嬉しい報告があった。会場を提供してくれそうなカフェがあるというのである。ザ・リブレットカフェ丸井静岡店である。念願だったカフェでの開催が一挙に現実味を帯びてきた。

さっそく店舗に伺い、店長と顔合わせする。店の存在を広く周知するという目的もあり、店長は哲学カフェの開催に意欲的である。ただ哲学カフェの開催時間が週末の日中にあたるということもあり、デパート内に店舗を構えるカフェとしては、料金設定等の条件を度外視することはできない。それでも店長の熱意と厚意により話がまとまり、12月からザ・リブレットカフェで哲学カフェを開催することに決まった。

デパートのフロアの一角を占めるカフェは、それまでの会議室とは異なり、明るく開放感に溢れている。当日のカフェでも、通りすがりに討論に耳を傾ける姿が見受けられた。しかし他方で、館内には絶えず音楽が流れており、小さな声は聞き取りにくい。店舗の努力により、いくら音量を絞ってもらったものの、館内放送やその他の雑音のため発言が聞き取りにくかったという声が多く寄せられた。

その後、条件面などで折り合いがつかなくなり、ザ・リブレットカフェでの開催は一回きりとなってしまった。2月からの会場を探し始めたところ、哲学カフェのメンバーの一人が会場を提供してくれることになった。こうして第10回哲学カフェは、スノドカフェ七間町で開催されることになった。



図11 第9回哲学カフェ@ザ・リブレットカフェ丸井静岡店



図12 第9回哲学カフェ当日の様子



図13 第10回哲学カフェ@スノドカフェ七間町当日の様子

いずれにしても、ザ・リブレットカフェでの開催とともに、新たな扉が開かれたように思う。第8回までのカフェは、イノベーション社会連携推進機構の協力のもと、静岡市産学交流センターの貸会議室で開かれてきた。借室料とコーヒー代はイノベーション社会連携推進機構によって負担され、参加費は無料であった。世話人たちは参加費の設定に頭を悩ませる必要がなく、参加者たちは無料のコーヒーを飲みながら、討議に参加していた。会議室という「温室」の中で、哲学談義をしていたと言ってよいだろう。

これに対して第9回以降の哲学カフェでは、料金設定等の条件について店舗側と交渉し、互いに納得のゆく結論を導出しなければならない。その共同作業は、哲学カフェの社会的意義に私たちの目を向けさせた。また身をおく空間を転じることで、それまで一度も発言しなかった参加者が数度にわたって発言したり、同じ参加者でも、発言内容に大きな変化が見られたりと、哲学カフェに変化が見られるようになった。新たな会場となったカフェの独特の雰囲気が討議の気分と内容に影響を与えたと考えてよいだろう。

## (2) 新しいスタイル

カフェの空間が醸し出す自由な雰囲気触発されて、私たちはそれまでのスタイルにいくつかの変更を加えた。第一に、受付開始時刻の14時半から30分間をウォーミングアップの時間と位置づけ、参加者にはカフェに到着した順に着席してもらい、同じテーブルの参加者と当日の討議テーマについて自由に語り合ってもらうことにした。15時になったら、参加者の様子を窺い、すぐに全体討議に入るか、もうしばらくテーブルごとの話し合いを続けるか、臨機応変に判断することにした。公式のグループ討論を非公式の話し合いに変えたということになる。

第二に、世話人ではなく参加者が次回の討議テーマを決めるように改めた。世話人たちは討議テーマの設定に難儀していた。哲学カフェ参加者の層と関心は多様であり、全員のニーズを満たすことはできない。そこで次善策として、アンケートで希望の多かったテーマを優先的に、社会的・時事的なテーマと哲学的・抽象的なテーマを交互に繰り返すかたちで設定してきた。

対して第10回哲学カフェでは、「哲学するとはどういうことか？」をめぐる全体討議（70分×2回）の終了後に30分間を確保し、第11回哲学カフェのテーマについて参加者全員で話し合った。はたして具体的な案が提起されるのか、世話人の中には不安を抱く者もいたが、予想に反して多くの案と意見が提起され、白熱した討論を経て、「自由に制限はあるのか？」というテーマが設定された。

発案者は、フランスのシャルリー・エブド社の襲撃事件を念頭に置きながら、個人の自由はどこまで尊重されるべきなのか、自由と同等、ないしそれ以上に尊重されるべき価値はあるのかという問題を提起し、多くの参加者の賛同を得た。世話人の間では話題にすらされたことのないテーマであった。参加者一人ひとりが哲学カフェの主役になりつつあることが実感された。

参加者たちは、自分たちで設定した問題について各人なりに考え、二か月後に哲学カフェに戻ってくる。他の参加者が何を考えてきたのか、好奇心を抱きつつカフェのテーブルに着く。そして互いが考えてきたことをテーブルの同席者と共有しながら、全員での討議に備える。「自由」をめぐる哲学討議は、二か月間の思索とそれに基づくテーブルでの討議により重厚で重層的なものになると期待される。

第三に、哲学カフェの企画・運営にかかわる業務をできるだけ合理化し、世話人の負担を軽減した。各回の哲学カフェのためにフライヤーを作成することをやめ、2015年の年間チラシに替えた。参加者全員でテーマを設定するという方法には、哲学カフェを「民主化する」とともに、世話人の負担を軽減するという狙いがある。前半部に実施してきたグループ討議の廃止も、結果的に、世話人の仕事を減らすことになった。役割分担が軽減されることによって、世話人の集合時間は受付開始30分前に遅められた。

このようにして世話人の立ち位置は、一般参加者のそれに近づいた。世話人たちは、ファシリテーターを務める1名を除けば、他の参加者とまったく同等に討議に加わることになる。負担の軽減により、世話人が気持ちの面で楽になれば、カフェの雰囲気に波及的な影響を及ぼすだろう。

最後に、コミュニティボールの代用として、第10回カフェからぬいぐるみを導入した。ぬいぐるみを手にしている人にだけ発言権を認めるわけである。それ以外の参加者は、発言者がぬいぐるみを手放すまで、耳を傾け続けなければならない。ぬいぐるみはたまたま私の自宅にあったものだが、馬の愛くるしい眼が参加者をリラックスさせたようで、自由に発言し、落ち着いて聴くという雰囲気が醸成されたように思う。

以上のようなスタイル変更は、哲学カフェの雰囲気を大きく変えた。哲学的討議がそれまでになく心地よく、私は「これが哲学カフェなんだ！」という感慨を覚えた。私たちは、バスターミナルに面したカフェ・デ・ファールで、マルク・ソーテの哲学カフェに参加しているような錯覚を起こした。

## (3) 素敵なカフェで共に哲学する

哲学カフェの新しいあり方を知った私たちは、哲学カフェという場を次のように記述しなおし、年間チラシにそれを書き入れることになった。

生きていくなかで、他の人や物事との出会いを通して、私たちは多くの問いの前に立たされます。それはごく身近な疑問だったり、社会生活にかかわる問題意識だったり、生老病死にかかわる難問だったりするでしょう。

それらの問いを共有し、討議を通じて共に掘り下げる場、それが哲学カフェです。

哲学カフェでは、参加者一人ひとりが自由に発言し、互いの発言に真剣に耳を傾けます。異なった価値観や考え方にふれ、自身の問いをさらに深めていきます。

素敵なカフェで共に哲学しませんか。

#### 4. 哲学実践の意義——結びにかえて

第1回カフェに参加者が殺到してから、広報活動を控えてきたにもかかわらず、哲学カフェ@しぞ〜かは平均して40名弱の参加者を得てきた。新聞社等の取材からも、哲学カフェに対する「熱」というものを感じてきた。そしてなにより私自身、哲学カフェ@しぞ〜かを創設し、ここまで継続してきた。今後も、哲学カフェを続けていきたいと願っている。それはどうしてなのか。哲学カフェには、どのような魅力と可能性が秘められているのだろうか。「哲学」という営みの本質に照らして、最後に、哲学カフェの可能性について展望しておきたい。

##### (1) 哲学の現状に対する反省

よく知られているように、古典期ギリシアの哲学者ソクラテスは、広場、路上、友人宅でひたすら哲学的対話を実践し、一冊の本も書くことはなかった。また市民革命期において哲学的対話は、市民的公共性の形成に重要な役割を果たした。しかし大学制度に組み入れられるとともに、哲学は、文献読解を中心にした学問という性格を強めていく。さらに20世紀に入ってから、発展する科学に対抗するかたちで、哲学の専門化と講壇化に拍車がかかる。こうして哲学においても。他の学問分野と同様に、専門家と非専門家との間に壁が築かれてしまった。哲学は人間の公的生活において不可欠な営みであったにもかかわらず、それが一部の専門家に専有されてしまっているのである。これに対して私は、河野哲也とともに次のように問いたい。

哲学さえも専門家のものであるなら、一体、どの学問が、どの知が一般市民のものになるのでしょうか。あらゆる分野の専門家が並べば、それで私たちの世界はすばらしいものになるのでしょうか。私たち日本人は、専門家にすべてを任せることがいかに危険なことであるかを、東日本大震災とその後の原子力発電所の事故でいやというほど理解したのではないのでしょうか<sup>(12)</sup>。

哲学研究者という専門家によって占拠されてきた哲学の領域を市民に開放し、市民とともに対話に基づいて哲学しようとする試みは、「哲学対話 philosophical dialogue」や「哲学プラクシス philosophy in practice」と総称される。哲学は、専門家の間での閉ざされた議論に終始することによって、生命力と創造性を失ってしまった。哲学対話ないし哲学プラクシスは、哲学のそのような現状に対する反省に立ち、ソクラテスの哲学的対話を原点として参照しつつ、哲学そのものを民主化する試みと性格づけられる。そして哲学カフェもその試みのひとつの形態である。

##### (2) ユネスコによる哲学の推奨

日本では導入が遅れているものの、哲学対話ないし哲学プラクシスは世界の多くの国々で、多様な様式のもと、盛んに進められている。ユネスコ（The United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization）も1995年に「哲学のためのパリ宣言 The Paris Declaration for Philosophy」、2003年に「哲学についてのユネスコ間域戦略 UNESCO Intersectoral Strategy on Philosophy」を公表し、哲学を推奨している。それはど

うしてなのか。

ひとつには、哲学が市民の判断力を涵養するからである。「哲学についてのユネスコ間域戦略」では、次のように指摘される。

哲学を教えること (the teaching of philosophy) は自由な市民の発展に寄与する。それは自分自身で判断すること、あらゆる種類の議論と向かい合うこと、他者が語らねばならないことを尊重すること、そして理性の権威にのみ服従することを奨励する (p.12)<sup>(13)</sup>。

こうした観点から「哲学は自由の学校である」(p.5)、「哲学そのものが自由の行使である」(p.4)と表現される。市民の判断力が政治的・経済的・文化的な共同生活を支える基礎的能力であり、また民主主義の土台であることを踏まえれば、哲学、わけても対話に基づく哲学実践は、市民教育(生涯学習・社会教育)の中心に据えられて然るべきである。

もうひとつには、哲学は、他者との対話を促し、そこから相互に対する尊敬と理解を育くむことで、人間的連帯を築く足場となる。こうした観点から哲学は、「哲学についてのユネスコ間域戦略」において「人間的連帯の学校」、「よりよい相互の理解と尊敬の基礎」、「市民間の対話を促進するうえで根本的」(p.6)と位置づけられる。

M. リップマンの図式によって整理すれば、哲学、なかでも対話に基づく哲学実践は、判断力を核とする「批判的思考」——常識や既存の考え方を鵜呑みにせず、ある考え方の真偽や妥当性を吟味する態度——と他者に対する「ケア的思考」——対話の主題や眼前の相手に注意を払い、気遣い、配慮し、慈しみ、育てようとする態度——をともに発展させるといってよいだろう<sup>(14)</sup>。リップマンの場合、批判的思考とケア的思考に加えて、「創造的思考」——想像的、実験的、発明志向的な態度により、新しいものを生み出す思考——が挙げられる<sup>(15)</sup>。ただしこれら三種の思考は、それぞれ独立に働くというより、むしろ思考のダイナミズムを表現する三つの次元といった方がよいだろう。

### (3) 哲学カフェの射程

現に哲学カフェの討論は、批判的思考、ケア的思考、創造的思考のいずれを欠いても、盛り上がらない。批判的思考とケア的思考のどちらかを欠落した討論は、けっして創造的なものになっていかない。逆にいえば、哲学カフェの参加者は対話という共同行為に与ることによって、批判的思考、ケア的思考、創造的思考を鍛えられる。それは哲学カフェで世話人を務める学生たちの成長からも如実に見てとられるし、自分自身を顧みても気づかされることである。いずれの場合にも、哲学対話を通して、批判的思考、ケア的思考、創造的思考を統合した全体としての思考力が育まれてきたのである。この経験に基づいて、私は現在、大学の講義等に哲学対話を積極的に導入している。

哲学カフェはまた、多くの新しい出会いに私を導いてくれた。性別、社会的属性、価値観、思想を異にする参加者、哲学カフェでなければ出会わないような人たちと、社会的地位や利害関係から離れて、自由かつ対等に討論する。それはすべての市民に開かれた「公的空間 public space」であり、そこで人はその言説によってのみ判断される。その意味で哲学カフェは、「無議の習慣」を克服する格好の場といっただろう。いや、もしそれが市民の判断力を涵養し、自由な市民を育成するだけでなく、他者との対話を促し、相互的な尊敬・理解に支えられた人間的連帯を築く足場とならしたら、さらに対話の主題や眼前の相手に注意を払い、気遣い、配慮し、慈しみ、育てようとする態度を培うとしたら、哲学対話は、福沢諭吉の想定を超えた射程をもつと言った方がよいだろう。

### (4) 新たな展開

カフェでの出会いを通して、私たちの活動は確実に広がりつつある。ローカルな足場を大切にしつつ、



普遍的な事柄を広く、深く探究していきたいという私たちの願いは、少しずつ実現されているように思う。たとえば常連の参加者の発案により、哲学カフェ@しぞ〜は通常のカフェと並行して、図14の通り、特別企画「原発県民投票を哲学する」（原発県民投票2015との共催）を実施している。

さらに私自身は、静岡市とその周辺地域のケア専門職と連携して、2015年1月から死生学カフェを立ち上げた。1月10日の創設記念会では、「死生学カフェという新しい試みのために」と題して講演した。死生学カフェは、3月7日の第1回を皮切りに、奇数月の第1土曜日に定期開催される。死生学カフェとは、現在の私の言葉では、次のように表現される。

死生学カフェは、生きること、死にゆくこと、かけがえのないものを失うことなど、生と死にかかわる多様な課題について、当事者の語りに聴くという姿勢を大切にしながら、対話を試みる場です。

これまで通り、偶数月に哲学カフェを、そしてこれから新たに、奇数月に死生学カフェを開催していく。そのなかで哲学カフェと死生学カフェの共通性と差異がどのように立ち現れるのか、哲学カフェと死生学カフェはどのような相互関係を結び、私の思考をさらに鍛えてくれるのか。新しい人や考えとの出会いを楽しみながら、今後も、二つのカフェに参画していく所存である。死生学カフェについては、いずれ機会を改めて報告することにした。

末筆になるが、哲学カフェにご協力いただいた静岡市産学交流センター、ザ・リブレットカフェ丸井静岡店、スノドカフェ七間町、静岡大学イノベーション社会連携推進機構、そして参加者と世話人の皆さんに、厚く御礼申し上げる。

(Endnotes)

- (1) Marc Saute, Un café pour Socrate, Robert Laffont, Paris, 1995 (『ソクラテスのカフェ』堀内ゆかり訳、紀伊國屋書店、1996年、60 - 61頁) .
- (2) 日野行介『福島原発事故 被災者支援政策の欺瞞』岩波書店、2014年
- (3) 宮本太郎『生活保障 排除しない社会へ』岩波書店、2009年、2頁。
- (4) 同書、28頁。
- (5) 福沢諭吉『文明論之概略』岩波文庫、1995年、117頁。
- (6) てつがくカフェ@ふくしまのブログで、現在 (2015年3月3日) でも読むことができる。http://blog.goo.ne.jp/fukushimacafe/e/1e736cd3ea0a9ad124c6e357c74ad0a6
- (7) 同じく、てつがくカフェ@ふくしまのブログでフォローすることができる。http://blog.goo.ne.jp/fukushimacafe/e/31730c9da38ffe02f2591e5495ff7ffd (2015年3月3日閲覧)
- (8) http://www.b-nest.jp/default.html (2015年3月3日閲覧)
- (9) Immanuel Kant, Kritik der reinen Vernunft, Werkausgabe Band IV, herausgegeben von Wilhelm Weischedel, Suhrkamp, 1974, S.699(B865) (『純粹理性批判』有福孝岳訳、『カント全集6』所収、岩波書店、2006年、115 - 116頁) .
- (10) http://blog.goo.ne.jp/fukushimacafe/c/6e12fc581cd07ece82f9d098ccef7cda (2015年3月3日閲覧)
- (11) 篠原一『市民の政治学 討議デモクラシーとは何か』、岩波書店、2004年、103頁。
- (12) 河野哲也『「こども哲学」で対話力と思考力を育てる』河出書房新社、2014年、71-72頁。



図14 哲学カフェ@しぞ〜が特別企画「原発県民投票を哲学する」チラシ



図15 死生学カフェチラシ



- (13) <http://www.unesco.org/new/en/social-and-human-sciences/themes/philosophy/> (2015年3月3日閲覧)
- (14) 河野哲也、前掲書、82頁、89頁。
- (15) 同書、86頁。